



—新春対談—

命を守り、暮らしを守り、三田を守る

森 哲男
三田市長



荒川 創一
市民病院事業管理者・院長

世界的規模の新型コロナウイルス感染症パンデミックが発生した2020年、「命を守る」ことを最優先とした私たちの暮らしには大きな変化が生じました。

三田市においても、ウィズコロナの社会の中、市民の安全安心を支えるため、さまざまな場面で命と暮らしを守る取り組みを進めてきました。

新春対談では、「三田を守る」そして「人口減少にも負けないまち」をテーマに、ウィズコロナ、アフターコロナの時代に三田が目指すべき新しいまちづくりの姿について、医療の最前線で闘っておられる荒川創一市民病院事業管理者・院長をお迎えして、お話を伺いました。

「断らない」命を守る取り組み

市民病院が取り組んできたコロナ対策、そして市民の命を守る市民病院のあるべき姿についてお聞かせください。

院長 市民病院は昨年2月に発熱外来を設け、コロナ対策の診療を始めました。当時は対処方法も確立されておらず、職員も不安だったと思い

ますが、市民をはじめとする人々の命を守るために必死に闘ってくれました。医療は命を守る最後の砦です。コロナ禍においても、地域の人々が安心して受診していただける病院を目指して、職員一同、日々懸命に取り組んでいます。こうした厳しい現場で働く中で、マスクなどの寄附をはじめ、多くの方からあたたかい励ましのメッセージを届けていただいたことは、病院職員の大きな励みになるとともに、市民病院が市民に支えられていることを改めて実感しました。職員を代表し、感謝申し上げます。

市長 市民病院の皆さんには荒川院長のリーダーシップのもと、市民の命を守るため日々コロナの恐怖に立ち向かい、昼夜を問わずご尽力いただいていることに心から感謝しています。市民病院がしっかりと機能を果たしていることは、市民の誇りでもあります。

院長 三田市民病院は、三田市を中心とする30万人の医療圏の中にある急性期病院として、救急医療を広域に担っています。私は院長就任以来、「救急を断らない」を合言葉に、24時間365日体制で適切で迅速な治療を行うことを目指してきました。病院全体

の共通意識として浸透してきた今では、ひと月に約3000件に上る救急車による搬送を受け入れ、三田市消防による救急搬送の約7割を当院で受け入れています。さらに、地域のかかりつけ医との連携も強化し、電話一本で緊急受診に対応するなどの仕組みも構築してきました。このような充実した医療体制を維持発展させるには、十分な医師数の確保、あるいは高度医療を実現する新しい医療機器の導入など、財政基盤の確立が不可欠であり、森市長には多大なご理解ご支援をいただいています。

市長 昨年はコロナの影響を受け、一般患者の受診が大きく減少し、病床の稼働率も6割程度に落ち込んだ時期がありました。それまでの黒字経営から減収により赤字に転じることは、市民病院の経営に大きな打撃となり、市民の命に直結する問題であると判断し、市としても早期に市議会の承認を得て、5億円を支援しました。

む7都道府県を対象とする緊急事態宣言が発出されたことを受け、三田市は4月15日に非常事態宣言を発出し、さまざまな人の「暮らし」を守ることを念頭に支援施策を進めてきました。特に配慮した点や苦労したことなどについてお聞かせください。

市長 緊急事態宣言下では、学校の臨時休校や公共施設等の閉鎖など外出活動の自粛をお願いしました。県からの休業要請や営業時間の短縮など市民・事業者の皆さんのご協力もいただきました。とりわけ、医療関係者や社会福祉施設関係者みなさんのご尽力で事業継続に取り組んでいただいたことにより、市民の暮らしを守ることができました。

コロナ禍で生まれた新しい仕組み

市長 市では、「自分を守り、人を守り、そして三田を守る」を目標に掲げ、①感染防止対

三田市民病院とコロナとの闘いの経過

時期	できごと
令和2年1月	国内で初めての感染者が確認される
2月	市民病院に帰国者・接触者外来（発熱外来）の設置
3月	県内で初めての感染者が確認される
4月	市民病院で陽性患者の入院受け入れ開始
10月	市民病院にウイルス抗原定量検査測定器の導入

市民病院の受診患者数など（11月末現在）

発熱外来の受診患者数	1,776名
PCR検査実施患者数	1,056名
抗原定量検査患者数	410名
陽性患者入院受入数	110名

「暮らしを守る」取り組み

昨年4月7日に兵庫県を



荒川 創一（あらかわ そういち）

2016年4月に三田市民病院事業管理者・院長に就任以来、「救急を断らない」を職員に浸透させ、24時間体制の救急医療を推進。また、兵庫県の「新型コロナウイルス感染症対策協議会」で座長を務め、「三田市新型コロナウイルス感染症対策本部」ではアドバイザーにも就任し、感染制御学のスペシャリストの立場から活躍されています。



—市民病院を広域的な「マグネットホスピタル」に—

市長 私たちの生活や考え方に大きな変化をもたらしたコロナ禍ですが、一方で三田市に大きなチャンスがやってきたと捉えています。価値観の変化は人々が「心豊かな暮らし」について考えるきっかけとなりました。阪神間の通勤圏内にありながら、自然豊かな景観や食の恵みに溢れ、リモートワークやワーケーションを実現しながら、自分

院長 三田市は、日本のいいところが凝縮されていて、兵庫の中でもバランスの取れたまちだと思います。日本の原風景である里山、農業の営み、一方でアクティブな若者が集う大学や商業地域、いろいろなインフラを兼ね備えています。市民病院も多様な魅力のひとつになれるよう今後も「救急を断らない」病院であり続けることを目指して頑張ります。

院長 コロナの影響で生き方や生活のあり方など、人々の価値観が大きく変わってきた中で、これからのまちづくりについてお考えをお聞かせください。

＝次の世代につなぐ三田＝



市長 昨年から提唱している「さんだ里山スマートシティ構想」もその一策です。実は、本市はスマートシティのインフラとなるマイナンバーカードの普及率が全国第3位（※1）と高いのです。これを活かし、自然あふれる三田の地で、ICT技術を活用した豊かな暮らしが実現できるまちづくりを目指していきます。

具体的には、①交通・移動手段 ②ワーケーション ③教育や医療などの分野で検討を始めました。交通では、高齢者・障害者も含めた移動手段を確保するため、昨年実施したウッディタウン地区での中型自動運転バス実証実験のようなチャレンジを継続してい

今年、明るい話題の一つとして、昨年延期された東京オリンピックの聖火リレーが5月24日、三田で行われます。まさに希望の灯が三田にやってくると思っており、一日も早くコロナ禍が収束することを願いながら、聖火リレーの灯に、多くの市民が未来への希望を感じてくれることを期待しています。

策②地域産業への支援 ③市民生活への支援という3つの緊急対策を手がけました。その中で、新しいまちづくりの可能性が見えてきたことは、未来の三田にとって価値ある1年だったと思います。例えば、地域産業への支援では、商工会青年部や関係者のアイデアを市が側面から応援するというまちづくりの仕組みができ、お弁当マルシェなどといった新しい事業が生まれました。また、国や県の支援を補うものとして事業者が独自で応援した「小規模事業者応援助成金」は、たくさんの方々に利用され、多方面から高い評価をいただきました。その他、市民生活の支援では、県の協力を得て実施した水道料金4カ月分無料化、一人暮らしの下宿学生に三田の食材を贈る「学生応援便」、妊婦の外出支援（タクシー助成）などを行いました。

院長 感染拡大を防ぎながら、コロナ禍においても立ち止まることなく、まちづくりの挑戦を進められていることに強いリーダーシップを感じます。市長とお話するたびに、10年20年先を見据えた地に足がついた三田のあり方、あるいは医療体制のあり方についてのお考えに共感しています。

＝三田を守りたいという想い＝

ウイズコロナ、アフターコロナの時代になっても、未来のまちがずっと安全安心であり続けるため、これからの三田を守る決意や想いなどについてお聞かせください。

院長 急性期病院が生き残っていくためには、①すべての診療科目を網羅していくこと ②医療機能を集約すること ③医師や医療スタッフを確保できること ④多くの診療分野において最新医療ができる医療機器が整備され、高度医療が遂行できることが必須です。

＝広域的な「マグネットホスピタル」に＝

院長 広域的に集約され、網羅された診療科と最新の高度医療が実践できるマグネットホスピタルは、若手医師にとって魅力ある病院であり、自然と優秀な医師が集まりやす。それに伴い、患者さんや医療スタッフも集まるという好循環が生まれます。平成28年度に策定した市民病院改革プランにも明記したとおり、三田市を中心とする六甲山系以北の周辺地域において、急性期病床を再編・ネットワーク化することが必要だと考えています。広域的なマグネットホスピタルとなることで、受け入れ可能な傷病も増え、救急搬入への対応率も向上し、市民のより大きな安全安心につながっていくと考えており、行政の力添え、後押しをぜひ期待しています。

＝人口減少にも負けないまちづくり＝

市長 コロナ禍に見舞われた昨年は「三田を守る」ことに全力で取り組みましたが、今年「人口減少にも負けない」

まちづくりにも注力します。昨年からの提唱している「さんだ里山スマートシティ構想」もその一策です。実は、本市はスマートシティのインフラとなるマイナンバーカードの普及率が全国第3位（※1）と高いのです。これを活かし、自然あふれる三田の地で、ICT技術を活用した豊かな暮らしが実現できるまちづくりを目指していきます。

具体的には、①交通・移動手段 ②ワーケーション ③教育や医療などの分野で検討を始めました。交通では、高齢者・障害者も含めた移動手段を確保するため、昨年実施したウッディタウン地区での中型自動運転バス実証実験のようなチャレンジを継続してい

※1 2年12月1日現在、人口に対する交付枚数率が約37%で全国第3位（特別区・市のみ）

